人とインタラクションの未来
2019 年度採択研究者

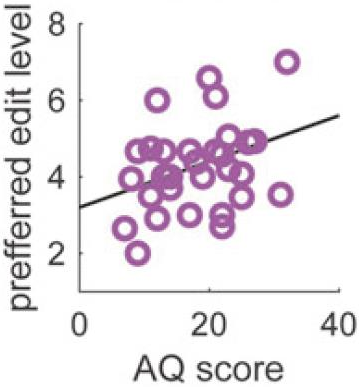
2019 年度
実績報告書

中野　珠実

大阪大学 大学院生命機能研究科
准教授

SNS が生み出す自己像の歪み形成機構の解明とその補正法の開発

§1. 研究成果の概要

情報技術の進展により、誰もが簡単に自分の顔の写真を加工することができるようになったことで、SNS 上には過度な美加工の写真で溢れかえっている。この過度な美加工による理想像と現実の自己像との乖離は、安定した自己像の形成に深刻な影響を及ぼす可能性が高い。そこで、本研究は、過度な写真加工への依存を生み出す心理要因を明らかにすることを目的に研究を行った。若い女性の顔を 8 段階で美加工した写真のデータセットを用意し、その写真の魅力度を若い女性たちに評価してもらった。その結果、中程度（level3-4）の美加工を加えた写真が最も魅力的と評価されたのに対し、過剰な加工(level 6-8)を加えた写真は、元の顔写真よりも魅力度を低く評価された。過剰な美加工は人間の顔のプロトタイプから大きく外れるために、不気味な感覚が生じてしまうと考えられる。しかし、自分の顔に対しては、他者の顔よりも強い加工を加えた方が魅力的と感じていた。他者の顔に対しては、不気味な感覚が低い加工レベルから立ち上がるのに対して、自分の顔に対しては、美加工による報酬系の働きが不気味な感覚の発生を抑制することで、美加工の依存行動が生じると考えられる。

さらに、自尊心の低い人、また、自閉症スコア（AQ）の高い人ほど、より強い美加工を加えた写真を魅力的と回答する傾向がみられた。両方の心理要因をあわせて回帰解析を行った結果、自尊心の低さよりも、自閉症傾向の高さの方が、過度な美加工を好む傾向を説明することが明らかになった。AQ の5つのサブスケールの中でも、特に「細部への注意」のスコアが、より強い美加工を好む傾向と相関していた。つまり、顔を全体ではなく部分で捉える傾向が高いと、過剰な美加工の不気味さに気づきにくくなる。これらの研究成果を英語論文として専門誌に発表した。(Nakano & Uesugi, 2020 Cyberpsychology, Behavior, Social Networks)